

Title	韓半島南部地域における初期造瓦技術の導入、普及とその背景：百濟、新羅の初期造瓦技術と仏教
Author	清水, 昭博
Citation	市大日本史. 13 卷, p.18-32.
Issue Date	2010-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

韓半島南部地域における初期造瓦技術の導入、普及とその背景

―百済、新羅の初期造瓦技術と仏教―

清水 昭博

一 はじめに

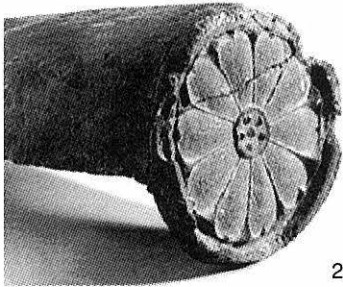
韓半島の海を隔てた東方に位置する日本は、韓半島三国時代の一國、百済から六世紀中葉に仏教を受け入れ、およそ半世紀後に本格的に仏教を導入し、造寺活動を活発化させる。用明二（五八七）年に発願、翌年に造営が開始された日本で最初の本格的な仏教寺院である飛鳥寺の造営に際しては、百済から造瓦をはじめとした様々な技術者が渡来し、その造営を援助したことを『日本書紀』や『元興寺伽藍』は伝える。そして、その記録が正しいことは、飛鳥寺でおこなわれた発掘調査とその出土瓦などによって証明されている（図1、奈文研一九五六）。その後の日本の造瓦技術の普及、展開は、仏教の普及、仏教寺院の造営と二人三脚で歩みを進めていったとみてよい。

日本にみられる、このような造瓦技術の導入、普及と仏教との関係は、韓半島においてどの程度、認められるのであろうか。本論は、ある意味で常識的に認識されていると思われる造瓦技術の導入、普及と

仏教との関わりを、改めて韓半島南部地域の百済、新羅を対象にして検討をおこなうものである。



1. 飛鳥寺（星組）



2. 飛鳥寺（花組）

図1 日本の瓦

二 百濟、新羅の造瓦技術の導入、普及の様相

本章では、造瓦技術の導入、普及と仏教との関係を検討する前提として、百濟、新羅両国における造瓦技術の導入、普及の様相を簡単に整理する。

(1) 百濟

百濟に造瓦技術が導入されたのは、漢城時代のことである。漢城時代の瓦は、王都のあった漢城（現・大韓民国ソウル特別市）を中心に分布する。漢城時代の瓦当文様は、瓦当面を十字の区画線によって四つの区画に分ける構図を基本とする（図2-1・2）。同様の構図は、中国漢代の雲氣文瓦当（軒丸瓦）に共通し、基本的にはその影響下にあると考えることができる（斐一九八二、亀田一九八四、谷一九八六、大脇一九九六）。また、漢城時代に確認できる丸瓦、平瓦の成形技法である「泥条盤築技法」は、韓半島に設置された楽浪郡（前一〇八―三二三年）の瓦にもあり（大脇一九九六、鄭二〇〇七）、漢城時代の瓦の直接的な源流は、楽浪に求めることができると考えられる。楽浪との関係は、瓦当文様に加え、軒丸瓦、丸瓦、平瓦などの製作技法に及ぶ（大脇一九九六、鄭二〇〇七）。しかし、両者の瓦当文様をみると、基本的な構図は近いものの、両者に完全に一致する例はなく、そこに百濟の独自性をみることは可能である。

漢城時代の瓦当文様の主流となるのは、十字の区画線によって瓦当

面を四区画に分け、さらに、主軸となる区画線から枝線を派生させ、枝線や中房に円文を配置する文様である（図2-1・2）。近年の研究では、こうした文様が錢貨をモデルとして成立したとみる見解が強い（以下、「錢文」とする。門田二〇〇二、権二〇〇三、梁二〇〇八）。楽浪經由で漢代の瓦当文様の構図を受け入れ、そこに、当時、交流のあった中国東晋の錢に対する思想的影響を背景に、百濟独自の瓦当文様である「錢文」を創出したのであろう。また、「錢文」軒丸瓦が、王宮や王陵など漢城の限られた遺跡でしか出土しない点（権二〇〇八）は、「錢文」軒丸瓦そのものが、百濟王家の富と権力を象徴するイメージ（梁二〇〇八）であった可能性を示している。なお、「錢文」軒丸瓦の年代を二―三世紀中頃まで遡らせて考える見解もみられるが（国立文化財研究所二〇〇二）、「錢文」軒丸瓦が出土するソウル特別市・石村洞四号墳例の築造年代である四世紀後半―五世紀初頭（図2-1、亀田二〇〇六）からみて、四世紀代を大きく遡るものではないと考えられる。

漢城時代には「錢文」軒丸瓦の他に、高句麗系の蓮蕾文軒丸瓦（図2-1・3・4、亀田二〇〇六）、中国南朝系の獸面文軒丸瓦（図2-1・5、権二〇〇八）、中国北朝（北魏）系の蓮華文軒丸瓦（図2-1・6、権二〇〇八）など、楽浪以外の国、地域の直接的な影響が見受けられる瓦も出土する。これらの事例から、年代的には、おおむね五世紀代になって、周辺地域との活発な交流がおこなわれた様子をうかがうことができる。しかし、その出土数からみて、大きな影響は想定し難い。

蓋鹵王二十一（四七五）年、百濟は高句麗に王都、漢城を奪取され、蓋

鹵王は殺された。同年、百済は文周王を立て、漢城のはるか南方の熊津（大韓民国忠清南道公州市）に都を遷し、国の再興をはかることになる。

熊津遷都後の瓦にみられる様相で注目されるのは、つぎの三点である。一点目は、瓦当文様に漢城時代の「銭文」が採用されず、ほぼ蓮華文に統一される点である。この点は、両時代の最も大きな違いといえる。蓮華文軒丸瓦導入に、当時、緊密な交流をおこなっていた中国南朝宋、齊の影響があつたとみてよいであろう（李二〇〇二）。

新都、熊津での造瓦活動の開始は、王宮と推定される公山城の造営に関わるものと推定される（『三国史記』文周王三（四七七）年条）。李タウン氏は、公山城から出土した素弁蓮華文軒丸瓦のなかで最も出土量の多い、同氏のいうIA一〜IA三タイプの年代をその頃に求める（図2-7・8、李二〇〇二）。年代の比定については検討を要するが、公山城出土瓦のなかで最も古相をもつとみられるこれらの一群が、熊津時代で最も古い瓦である可能性は高いと筆者も考える。ただ、公山城の一群の瓦当文様は公山城以外の遺跡に展開しないことには注意すべきである。

二点目は丸瓦や平瓦の製作技法に関して、漢城時代と熊津時代の様相の違いが明らかにされている点である（崔二〇〇三）。両時代の差について具体的な説明は省くが、こうした点は漢城時代と熊津時代の造瓦技術にある種の断絶があつたことを示すものとみられ、そこに外来的影響をうかがうことは可能である。

しかし、三点目として、先の公山城など熊津時代でも初期の資料に

漢城時代に系譜をもつ製作技法である「SR（*slight round tile*）技法」が確認できる点にも注目する必要がある。SR技法とは、丸瓦を瓦当側面に取り付け、そのまま外縁として利用する技法である（図2-18、大脇二〇〇七）。漢城時代の瓦にSR技法は確認できないが、同時代にも認められる「粘土円筒嵌め込み技法」の改良でSR技法が成立したとすれば、百済のなかで成立した技法とみなすことができる（大脇二〇〇七）。そうであれば、熊津時代には、その初期から外来的影響が認められる一方で、漢城時代の造瓦技術が継承される側面もあつたということになる。

熊津時代後半期（六世紀前半）には中国南朝梁の影響をより明確にうかがうことができる。すなわち、宋山里古墳群・武寧王陵の「土…壬辰（五一二年作）銘埴や宋山里六号墳の「梁官瓦為師矣」銘埴の存在によって（国立扶余博物館二〇〇二）、六世紀前半に埴築墓に使用する埴の生産に関わり、中国南朝梁からの直接的な技術指導があつたことを知ることができるのである（図2-9・11）。

また、百済で最初の本格的な仏教寺院である大通寺（忠清南公州市班竹洞）の造営（六二七年）とその後の泗泚（韓国忠清南道扶余邑）への遷都（聖王一六（五三八）年）という事業も、中国南朝系技術の導入の背景として注目される。大通寺の寺名の「大通」が梁の年号（五二七〜五二九年）を意味し、同寺が梁の武帝のために創建されたとの由緒が伝えられるように（『三国遺事』卷三、興法第三 原宗法興 厭憍滅身「又大通元年丁未、為梁帝創寺於熊川州、名大通寺」）、同寺と梁との関係は強く、そう

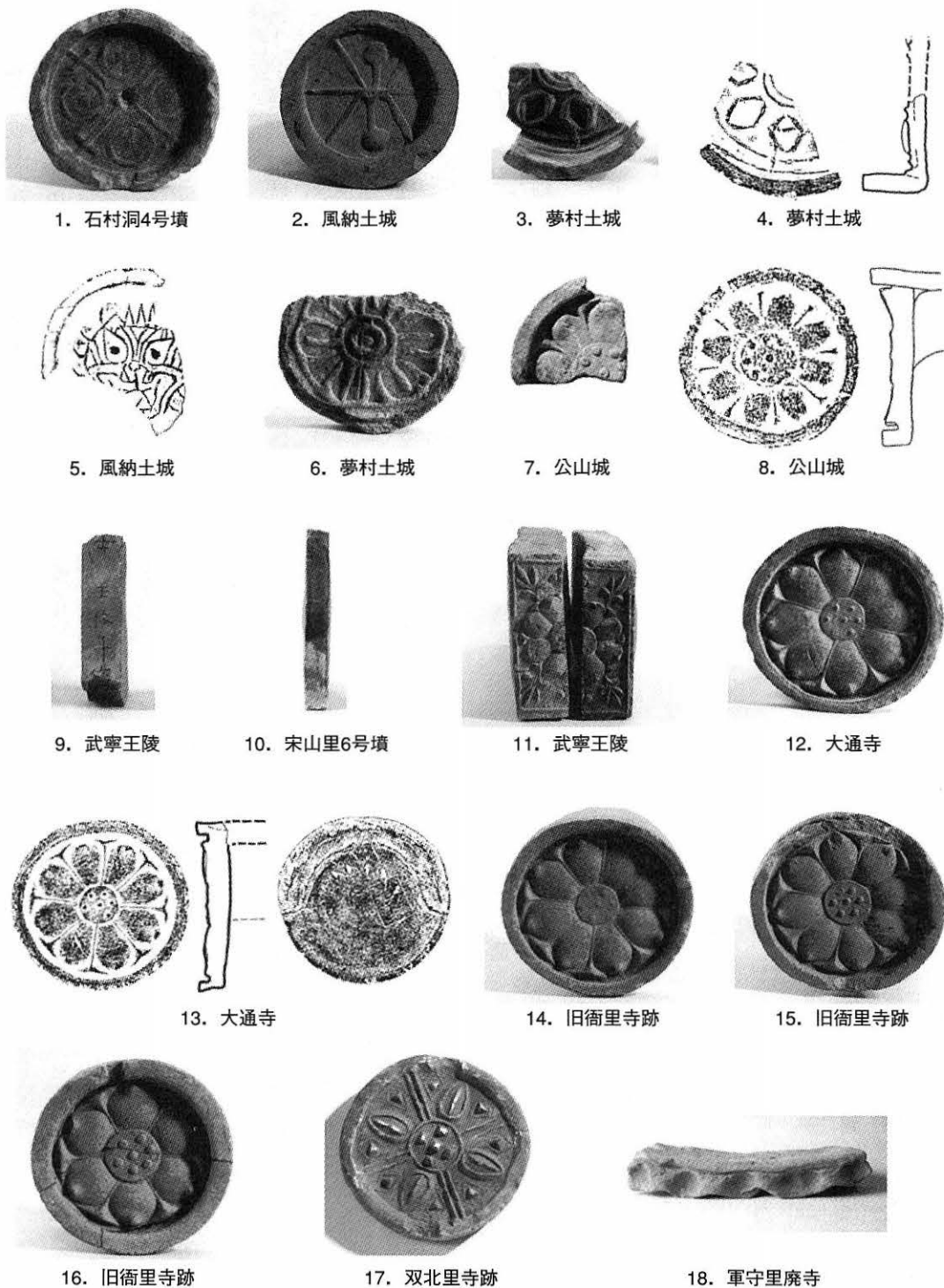


図2 百済の瓦

した寺の造営を契機に中国南朝系の技術が導入されることはあつたと考えられる。また、遷都にもなつて、王宮や官衙、寺院など、瓦を大量に必要とする施設の造営がおこなわれたことは疑いないが(李二〇〇二)、そうした状況が中国南朝系の造瓦技術が展開する契機となつたものと推測される。造瓦技術に関するものではないが、遷都直後に仏教関連の知識、技術を要請する目的で梁へ使節が派遣されている点も、上記のような状況を反映してのことであろう(『梁書』卷三、武帝本紀、中大通六年三月条)。

大通寺から出土する弁端点珠式軒丸瓦を祖形とする「大通寺式」軒丸瓦は、中国南朝の瓦の特徴である瓦当裏面回転ナデ成形の痕跡を確認することができ(清水二〇〇三・二〇〇四)、技術的にも中国南朝につながる事がわかる(図2-12・13)。また、その後、大通寺式は熊津、泗泚時代を通じて主流的な文様として百済で大きく展開してゆく(図2-12-16)。大通寺が創建され、泗泚遷都がおこなわれた五二〇〜五三〇年代は、造瓦技術の展開のうえで大きな画期であつたとみなすことができる。

なお、泗泚には軍守里廢寺・波状重孤文軒平瓦(朝鮮古蹟研究会一九三五)、双北里寺跡・蓮蕾文軒丸瓦(朴二〇〇四)のように中国北朝や高句麗の影響が推定される瓦も存在する(図2-17・18)。しかし、出土数からみてその影響はさほど大きいものではないと思われる。やはり、熊津、泗泚時代の百済の造瓦技術への中国南朝の影響は、大きいと判断できる。

(2) 新羅

新羅に造瓦技術が導入された時期については、月城例などの製作技法を根拠に四〜五世紀代に遡らせる意見もあるが(金二〇〇五)、現状では六世紀前半とみるのが確実なところと考える(金二〇〇六、比嘉二〇〇八)。新羅の初期造瓦技術への周辺国の影響は、瓦当文様という点では比較的理解しやすいといえる。初期の瓦当文様に百済、高句麗の影響が認められることは、衆目の一致するところである。また、蓮弁の中央に鏑を有する有軸素弁蓮華文の一群に関しては、中国南朝の影響をうかがうことができる(井内一九七五・二〇〇二、趙二〇〇六、清水二〇〇七)。以下では、新羅の造瓦技術導入期の状況を整理する。

百済の影響を受けた素弁蓮華文軒丸瓦は、弁端点珠式、弁端切り込み式、弁端曲折式などの諸形式に細分できるが(金二〇〇四)、百済でも主流の弁端点珠式(先述、大通寺式)が主体となる(図3-1)。百済系の弁端点珠式の年代は、皇龍寺(五五三〜五六六年)では同形式が出土せず、三角突起式(弁端切り込み式)が主体となることから、皇龍寺創建以前の年代を考えることができる(比嘉二〇〇八)。また、百済における弁端点珠式の初現は、五二七年に創建された大通寺例に求められることから(清水二〇〇三・二〇〇四)、五二七年以降の六世紀前半の時期と考えられる。

ところで、百済の影響を受けた弁端点珠式軒丸瓦は、六世紀前半の月城例をはじめとして、泥条盤築技法で製作された例が多い(国立慶州博物館二〇〇〇)。しかし、泥条盤築技法は、百済では漢城時代に盛行



図3 新羅・中国南朝の瓦

した技法であり(鄭二〇〇七)、熊津、泗泚時代に多く認められる技法ではない(戸田二〇〇一)。泥条盤築技法が百済につながる可能性は低いといえる。その点に関しては、泥条盤築技法が土器と共通する技法であること、また、瓦陶兼業窯である勿川里瓦窯跡において泥条盤築技法で製作された百済系軒丸瓦が出土していることから(図3-2・3)、陶工の関与を推定する(沈二〇〇一)。新羅の初期の瓦に泥条盤築技法によるものが多くみられる背景に、陶工の造瓦への参加という状況があったものと考えられる。なお、六世紀後半の事例ではあるが、皇龍寺例には瓦当裏面に回転ナデ成形の痕跡を確認することができ(図3-4、国立慶州博物館二〇〇〇)、同期における百済との技法的なつながりを認めることができる。

高句麗の影響を受けて成立した軒丸瓦の特徴は、弁端が尖形をなすことである(図3-5)。蓮弁が中房から独立し、三角形ないしは楔形の大きい間弁と高い外縁をもつ点も特徴的である。高句麗系の年代については、相形と考えられる月城例をもって五世紀末葉とする見解もあるが、現状では、六世紀前半〜中葉の時期とみるべきであろう(比嘉二〇〇八)。五五三〜五六六年に造営された皇龍寺で、月城例よりいくぶん退化した瓦が出土する点もその年代観を補強する(図3-6)。しかし、中房の形状は円柱状であり、高句麗でみられる半球形の中房とは異なり、そこに他(おそらく百済)からの影響を読み取ることができると考えられる。

製作技法をみると、瓦当裏面に平行文叩きの痕跡を残すものや、百

済・熊津で成立した「SR技法」で製作された軒丸瓦がみられるなど(天脇二〇〇七)、高句麗よりも、むしろ、百済に系譜をもつ技法が顕著に認められ、生産の初期段階から百済系の技術により高句麗系軒丸瓦の生産がおこなわれていたことがわかる。この点は、百済系の造瓦技術が高句麗系に先行して導入されていたことを示しているものとも思われる。

新羅の有軸素弁蓮華文については、高句麗の蓮蕾文に由来するとの見方が主勢であるが(姜二〇〇〇、金二〇〇〇)、中国南京周辺から出土する類例の存在からみて(図3-11・12)、中国南朝系の文様とみるほうが理解しやすい(図3-8・10、井内一九七五・二〇〇二、趙二〇〇六、清水二〇〇七)。古新羅を代表する六葉の有軸素弁蓮華文は、中国南朝系の有軸素弁蓮華文の系譜で成立した文様である(図3-13、趙二〇〇六)。中国南朝系の年代については、皇龍寺再建伽藍の造営と関連して、六世紀第四半期に導入されたものとの見解がある(趙二〇〇六)。筆者も新羅で中国南朝系の瓦が普及する時期は、その頃とみてよいと考える。ただ、その相形に関しては、中国南朝梁代の南京市府八府塘例(図3-11、賀二〇〇五)に類似する資料が輿輪寺跡(慶州市沙正洞)から出土していることに注目したい(図3-7、国立慶州博物館二〇〇〇)。すなわち、輿輪寺跡例が同寺の創建瓦とすれば、中国南朝系の瓦の年代も、同寺の造営期間である法興王一四(五二七)〜真興王五(五四四)年頃まで遡る可能性もあるとみるのである。

中国南朝系の製作技法については、多くの情報をもたないが、瓦当裏面の回転ナデ成形の痕跡や瓦当裏面の叩きを確認することはできる

(図3-14・15、山崎二〇〇八)。回転ナテ成形の痕跡は、中国南朝の瓦にも確認できるものであり(図3-16、賀二〇〇九)、大きくは中国南朝系の造瓦技術とみなせ、文様、技術ともに中国南朝から移入された可能性を想定することができる。しかし、先述したように、同技法は、百済系にも確認することができるので、中国南朝の直接的な系譜とみるか、百済の影響とみるか、その判断は難しい。瓦当裏面の叩きも百済に系譜をもつ技法である。

新羅の初期の造瓦技術の動向は、文様的には、六世紀前半に百済から導入され、その後、やや遅れて、六世紀中葉を前後する頃に、高句麗、中国南朝系の文様が採用されるという流れで理解することができる。しかし、高句麗、中国南朝系にも百済系の技術が認められることから、技術面に関しては、百済の影響がより大きいと判断することができる。

以上、百済、新羅両国の造瓦技術の導入、普及の様相を検討してきたが、ここで改めてその要点をまとめておく。

百済の造瓦は四世紀代に楽浪系の技術を基層として始められた。そこで採用された瓦当文様は、漢代の雲気文の文様を基本として、東晋の思想的影響のもと、百済で創作された「銭文」であった。熊津で再興された百済は、銭文ではなく、蓮華文を採用する。熊津遷都後のこの変化には大きく注目すべきであり、中国南朝宋、齊の強い影響をうかがうことができる。しかし、一方で熊津時代初期の瓦と推定される

公山城例の文様系譜が広く展開しない点にも、留意する必要がある。百済において中国南朝の影響がより明確になるのは、武寧王陵(五二五年)や宋山里六号墳が築造される六世紀前半のことである。また、やや遅れて、五二七年に大通寺が造営され、五三八年には泗泚への遷都が挙行される。先述したように、大通寺の創建瓦を祖形とする大通寺式(弁端点珠式)がその後、主流的な文様となる背景には、大通寺の創建、あるいはその後の泗泚遷都という大事業が大きく影響したことをうかがわせる。五二〇〜五三〇年代は、百済の造瓦技術の展開において大きな画期となった時期と考えることができる。

新羅の場合、瓦当文様のあり方から、百済、高句麗、中国南朝といった周辺諸国の影響を比較的容易に理解することができる。それぞれの系統の出現時期は、現状では、五二七年以降の六世紀前半に百済系が登場、六世紀前半〜中葉に高句麗系、中国南朝系がおそらく輿輪寺の造営にともない五二七〜五四四年頃に導入されるという図式が想定されるが、大局としては、六世紀前半〜中葉という短い期間に、周辺諸国の造瓦技術を複雑に取り込んだ状況に注目すべきであろう。製作技法という側面をみると、高句麗、中国南朝系には、やや先行して導入された百済系の影響がみとめられ、百済の影響力の大きさを知ることができるとができる。

三 造瓦技術の導入、普及と仏教

前章では、百済、新羅の造瓦技術の導入、普及の様相を簡単に整理

してきた。本章では、その内容を受けて、本論の課題である両国における造瓦技術の導入、普及と仏教の伝来、受容との関わりについて検討をおこなう。前章では、百濟、新羅の造瓦技術の導入、普及の様相を簡単に整理してきた。本章では、その内容を受けて、本論の課題である両国における造瓦技術の導入、普及と仏教の伝来、受容との関わりについて検討をおこなう。

(1) 百濟

百濟における仏教伝来は、枕流王元(三八四年)に胡僧摩羅難が東晋より来て、百濟に仏教を伝えたこととされる(『三国史記』百濟本紀第二一四 枕流王)。枕流王は宮中にこれを迎えて礼敬を致し、翌年には漢城に仏寺を創建し、得度僧一〇人を住まわせたという。百濟の仏教伝来は、百濟が最初に東晋へ遣使を派遣した年から約十二年後のことであった。この時期における仏教の受容には、高句麗との緊迫した関係を背景に、東晋との関係を深める意図があったものと考えられる(河上二〇〇八)。しかし、その後、漢城時代には仏教関係の記録はなく、また、仏教寺院等の存在を示す明確な遺構、遺物もない。漢城時代に仏教は受容されたものの、大きくは普及していなかったものと推測される。

そのことと関連して、漢城時代の瓦で注目されるのが、瓦当文様に蓮華文でなく、「銭文」が主に採用されていることである。「銭文」は、中国東晋の思想的影響を受けて、百濟において創出された文様とみられるが(門田二〇〇二)、漢城時代、仏教を象徴する文様である蓮

華文でなく、「銭文」が採用された背景には、百濟で仏教が普及していない状況を想定することは可能であると思われる。この点は、高句麗において仏教が普及する四世紀前半段階の瓦当文様が蓮華文ではなく、雲気文を基本に高句麗で創作された卷雲文であり、蓮華文(蓮蕾文)が普及するのは仏教を受容した四世紀後半を待たねばならない点と近い様相を呈する。¹⁾

百濟において本格的に仏教を受容されるのは、武寧王(五〇一〜五二三年)、聖王(五二三〜五五四年)の時代になってからのことである。両王の時代に五部制、五方制を採用するなど、中央集権化が進められるが、その精神的支柱としての側面もあり、仏教は受け入れられることになったのであろう。この時期には、梁で三十余年の修行をおこなったのち、帰国した沙門・發生や、中印度の常伽那大律師で五年の修行をおこなない、梵僧倍達多三蔵を伴い、帰国した沙門・謙益など(中井一九九四)、具体的な僧の動きも知ることができ、百濟で仏教が本格的に興隆している様子をうかがうことができる。また、先述のように、聖王は、大通元年(五二七)に梁の武帝のために、梁の年号「大通」を冠した、大通寺を造営している。大通寺は、国が指導して造営された国営寺院であり(蘭田一九八九)、その段階で国家的な仏教の受容が本格化したことがわかる。

大通寺跡と推定される遺跡は、公州市班竹洞周辺に存在する。付近からは講堂跡と推定される基壇跡が検出され、一塔一金堂式の伽藍配置が推定されている(軽部一九四六)。調査は部分的なもので、伽藍配

置や寺域の復元については今後の課題であるが、周辺からは熊津時代に遡る弁端点珠式軒丸瓦（「大通寺式」）や「大通」、「通」銘文字瓦も採集されており（李二〇〇二）、少なくとも、この周辺に大通寺跡を比定することは妥当と考える（清水二〇〇三・二〇〇四）。こうした具体的な遺構、遺物の存在をもつてしても、熊津時代後期になって、仏教が興隆した様子を知ることができる。

さらに、造瓦との関わりという点では、大通寺から出土する弁端点珠式（「大通寺式」）軒丸瓦のあり方は重要である。すなわち、大通寺創建瓦を祖形とする「大通寺式」軒丸瓦は熊津時代だけでなく、泗泚時代を通じて、百済の素弁蓮華文軒丸瓦を代表する瓦当文様として普及するのである（清水二〇〇三・二〇〇四）。そこに、外交の上で必要という側面があるとはいえ（河上二〇〇八）、梁から仏教を受容した百済が、積極的に仏教を普及させ、「大通寺式」の文様を、仏教を象徴する文様として尊重した様子を垣間見ることができると思われる。また、先述したように「大通寺式」軒丸瓦には、瓦当裏面の回転ナデ成形の痕跡を確認できるものがあるが、そうした痕跡は中国南朝の瓦にも確認することができる。百済と中国南朝の造瓦が技術的にもつながることを推測することができる。

なお、熊津時代において、大通寺式に先行するとみられる公山城例の瓦当文様ですでに蓮華文は採用されている。蓮華文を採用した背景には、当時、活発な交流をおこなっていた中国南朝の宋、齊の影響が想定される（李二〇〇二）。しかし、熊津で公山城例の同系文様が広く

展開した状況をうかがうことができない点にも注意しなければならぬ。やはり、五二〇年代に大通寺が造営され、それ以降、泗泚遷都の時期にかけて、大通寺式軒丸瓦が普及してゆく状況の方が、百済の武寧王、聖王代の仏教の普及と相関する動向として注目される。

百済の武寧王、聖王代は、ほぼ梁の武帝の在世（五〇二～五四九年）に併行するが、外交的な目的で本格的に仏教を受容した百済は、梁との関係を考慮して、王権主導で崇仏を推進していく（河上二〇〇八）。そうした背景のなかで、造瓦技術は普及、展開していったものと考えられる。こうした状況は、以下に述べる新羅でもうかがうことができる。

（2）新羅

新羅の仏教伝来に関して『三国史記』（新羅本紀第四 二三 法興王）は、法興王一五年（五二八）に「肇て仏法を行ふ」と記す。同条には、仏教公認にいたる経過が記述されるが、その内容は、以下の三話に大別できる（蘭田一九八九）。一話は、訥祇王の時代（四一七～四五八年）に沙門墨胡子が高句麗から新羅の一善郡に来て、同郡の毛礼の宅の窟室に居し、梁の使がもたらした「衣著の香物」の用途を解し、香を焚き、王女の難病を平癒したという内容。二話は、毗处王の時代（四七九～五〇〇年）に僧阿道が毛礼の家にやってきて住んだが、数年後に病により亡くなったという内容。三話は、法興王が仏教を信奉しようとした際、群臣が反対したが、近臣の異次頓が身を犠牲にしたことよって仏教を受容することになったという内容である。

末松保和氏による新羅の仏教伝来に関わる検討によれば、その内容の核心としては、①新羅仏教の伝来者は、僧阿道であったこと。②新羅仏教の起源的年代は、大通元年_二法興王丁未_一(五二七)年に求められること。③新羅仏教は高句麗の伝来によって素地が築かれ、梁使の到来を契機として国家容認に至ったことの三点に帰結できるという(末松一九五四、藪田一九八九)。また、新羅は百済の仲介で五二一年に梁に外交するが、梁との外交を契機に仏教の受容が本格化すると藪田香融氏は考える(藪田一九八九)。また、河上麻由子氏は、新羅が梁の国教とすべき存在となっていた仏教を公認することで、梁の歡心を買おうとしたという側面を強調する(河上二〇〇八)。いずれにしても、仏教受容の年である五二七年に新羅最初の本格的な仏教寺院である興輪寺が天鏡林の地に創建され(『三国遺事』興法第三 原宗興法 厭禍滅身)、本格的に仏教を受容することになるのである。

以上、新羅においてはまず、五世紀代に高句麗から私的な形で仏教が伝来し、その後、五二七年になって梁との関係を築くために国家的に仏教が受容されたという流れを知ることができる。

さて、前章のように、新羅の造瓦技術が周辺諸国の影響のもと、六世紀前半_一六世紀中葉という短期間のあいだに導入、普及されたものとみると、大きくは、仏教を本格的に受容した時期と造瓦の開始時期が重なることになる。新羅においては造瓦技術と仏教の受容、普及という事象は、ほぼ連動しているものととらえることができる。また、新羅の造瓦と仏教との関わりを考えるうえで興味深いのは、文献史料が伝える

高句麗からの仏教伝来を示唆するように、新羅の初期の瓦に高句麗系の瓦がみられ、また、梁との外交を契機に仏教を受容したことと符号するかのようになり、中国南朝系の有軸素弁蓮華文がみられることである。

初期の瓦に高句麗系が多い点は、仏教伝来の経路と関わるものと思われる。五五三年に造営された皇龍寺の創建瓦に高句麗系の瓦が採用された背景としては、五五一年に新羅の武將、居柴夫に伴われてやってきた高句麗僧、惠亮の動向が関わりとみる見解がある(藪田一九八九)。

惠亮が僧統に任じられ、彼の奨めで百座仁王講会と八閼法会が創始され、それが皇龍寺でおこなわれたことなどから、皇龍寺の造営を惠亮の建議によりものとする考え(李一九八一)を前提とした説であるが、六世紀後半に高句麗系が普及する背景となった可能性もある。

新羅で中国南朝系の瓦が出土する遺跡に、梁との外交を契機に仏教を受容し、その流れで造営された興輪寺跡が含まれることは(国立慶州博物館二〇〇〇)、新羅と梁との関係をうかがううえで重要である。先述したように、興輪寺跡からは新羅の有軸素弁蓮華文のなかでも、中国南朝の事例により類似した瓦が出土している(図3-7)。そうした瓦が興輪寺跡から出土する背景として、百済と同様、仏教の受容にともない、梁から仏教寺院の造営に関わる様々な知識や技術の提供があったものと考えられないだろうか。その後、六世紀後半には中国南朝系の瓦は皇龍寺などの所用瓦として採用され、七世紀前半には新羅を代表する様式として、主流的な地位を築くことになる。この点は、新羅の初期仏教における梁の影響が大きく、しかも長期にわたり維持さ

れたとする見解（河上二〇〇八）とも符合する事象といえる。

このように中国南朝系の瓦が盛行する背景にも、梁との通交以来、中国南朝との関係を重視した新羅の政治的、思想的状況が反映しているであろう。外交的な目的で仏教を受け容れた新羅は、王権主導で崇仏を推進していく（河上二〇〇八）。そうした状況は、先にみた百済と同じ状況であり、そうした背景のなかで、造瓦技術は普及していったものと理解することができると。百済、新羅両国の仏教の受容とともに造瓦技術の普及に中国南朝梁が与えた影響は、大きいといわざるを得ない。

それでは、初期の新羅の瓦当文様や製作技術において、大きな影響を及ぼしたと考えられる百済との関係は、どのように考えられるであろうか。仏教受容期における新羅と百済の関係を記す記録はみられないが、ここでは、単独で通交できない新羅が百済の仲介で五二一年に梁に通交している点に注目したい。倭国（日本）が梁との関係を結ぶにあつたの必要な手段として、百済が倭国に仏教を公伝したという図式（河上二〇〇八）が新羅と百済のあいだにも成り立つとすれば、仏教受容や仏教寺院造営に際しても、百済が何らかの援助をしたということもあり得るのではないだろうか。そのような背景で、百済系の造瓦技術が新羅の初期の技術に大きな影響を及ぼしたものと理解するのである。

四 まとめ

本論では、韓半島南部に位置する百済、新羅両国における造瓦技術

の導入、普及の様相を周辺国との関係を中心に整理し、造瓦技術の導入、展開と仏教の伝来、受容との関わりについて述べてきた。結論的には、日本と同様に、百済、新羅においても造瓦技術の導入、普及に仏教の伝来、受容は大きく影響したものと筆者は考える（表1）。

しかし、その具体的な様相は両国で異なるものであった。すなわち、百済では四世紀に造瓦が開始され、仏教も四世紀後半に伝来している。ただ、その段階では仏教は本格的に受容されず、造瓦への影響もさほどないとみられる。百済で仏教の受容が本格化されるのは、六世紀前半の武寧王、聖王兩代であり、造瓦活動も、五二七年の大通寺の造営や五三八年の泗泚遷都を契機にして活発化する。その動向は、仏教受容の本格化と仏教寺院の造営に関わるものと考えてよいと思われる。一方の新羅は、百済よりも遅れた六世紀前半〜中葉に百済、高句麗、中国南朝の影響を受けて造瓦を開始する。百済では四世紀代に造瓦を開始しており、同じ頃に隣接する新羅に造瓦技術が伝わってもよいはずであるが、実際には、六世紀前半まで造瓦活動は本格化しない。この点は、五二七年の仏教の本格的な受容と仏教寺院の造営と造瓦技術の導入、普及が連動していることの証左になると思われる。

近年、韓半島諸国の仏教伝来や本格的な受容に関して、各国が置かれている内政的、外交的な状況が、大きく関わっていることが主張されているが（藪田一九八九、石井一九九六、河上二〇〇八）、そうした状況は造瓦技術の導入、普及にも影響を与えたものと考えられる。百済、新羅両国とも中国南朝梁との関係をもって六世紀前半に仏教の受容を

表1 東アジアの仏教受容と寺院造営

西暦	高句麗	百濟	新羅	中国/日本	造瓦技術
372	小獸林王2 高句麗仏法の始め。秦僧順道、秦王苻堅の命を受け仏像・経論をもたらし、高句麗に来る。			前秦：苻堅、順道を高句麗に遣わして仏像経文を贈る。	4c前半 高句麗・卷雲文
374	小獸林王4 秦僧阿道、高句麗に来る。				
375	小獸林王5 肖門寺を創し、順道を置き、伊弗蘭寺を創し阿道を置く。				4c後半 高句麗・連雷文
384		枕流王1 9月、胡僧摩羅難陀、晋より百濟に来る。百濟仏法の始め。			4c後半 百濟・「銭文」
385		枕流王2 2月、百濟仏寺を漢山に創し、僧10人を度す(史記24)。			
393	広開土王3 高句麗9寺を平壤に創す。				
396	広開土王6 晋僧曇始、遼東より高句麗に来る。				
417			訥祇王1 高句麗僧曇胡子、一善郡に来る。		
475		熊津遷都。			477~485? 百濟・蓮華文 (中国南朝系)
479			炤智王1 炤智王代、阿道和尚新羅に来る。		
526		聖王4 百濟沙門謙益、中インド常伽那寺に赴き、梵文律部を学んで帰る。百濟律宗の始め。			527~ 百濟・「大通寺」
527		聖王5 百濟大通寺建つ。	法興王14 異次頓、法のため身を捨てる。興輪寺建つ(新羅仏教の始め)。	梁：同泰寺建立(521~527)	6c前半 (527~550) 新羅・百濟系
529				梁：武帝、同泰寺に無遮大会を設け、捨身す。	527~544? 新羅・中国南朝系
535			法興王22 興輪寺、工を起こす。		
538		泗泚遷都。		日本：百濟聖明王より仏像・経論をおくられ、仏教が正式に伝わる。(['元興寺縁起'])	
541		聖王19 遣使、梁に赴き、毛詩博士、涅槃など経義ならびに工匠書師を表請す。			6c前半~中葉 新羅・高句麗系
544			真興王5 興輪寺完成。		
549			真興王10 新羅僧覺徳、梁使と共に仏舍利を齎し、新羅に帰る。		
552		聖王30 百濟聖王、日本に金堂釈迦像1軀、弥勒石仏及び精舎経論若干巻を送る。		日本：仏教の公伝。 (['日本書紀'])	
572			真興王33 新羅、戦没者のために八閔を設ける。		
577		威徳王24 仏工、寺匠日本に赴く。初めて百濟仏像を送る。遣使大別王らに付して経論ならびに律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造仏工、造寺工ら6人を日本に送る。			
584	平原王26 鹿深臣、日本に赴き弥勒石像1軀をもたらす。釈惠便(高句麗僧)、蘇我馬子の請により善信、禪藏、惠善の3比丘尼を度す。				
587		威徳王34 6月、日本の善信阿尼等、百濟に赴き戒法を学ぶことを願う。			
588		威徳王35 百濟、僧惠徳、令斤、惠亮等を日本に送り仏舍利を献ず。		日本：飛鳥寺造営	588 日本：百濟より瓦博士渡来 (['日本書紀'])
589			真平王11 3月、新羅円光法師、求法して陳に入る。		

本格化させる。そうした動向で、大通寺、興輪寺が造営され、造瓦技術の導入、普及も活発化したのであろう。両寺の造営が開始された年は、梁代仏寺の中心的存在となる同泰寺の造営が、まさに完了した年でもあった（『歴代三宝紀』巻三、諏訪一九九七）。

【註】

(1) 高句麗の造瓦技術の導入、普及と仏教の関わりについては、別稿で論じたい。

【参考文献】

- 井内 潔 一九七五「新羅素弁紋系屋瓦の源流」『井内古文化研究室報』一一二、井内古文化研究室
- 井内 潔 二〇〇二「中国南朝屋瓦の変遷」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』
- 斐 基同 一九八二「石村洞四号墳横住居址出土百済土器類」『古文化』第二〇集、韓国大学博物館協会
- 李 基白 一九八一「皇竜寺とその創建」『新羅と日本古代文化』田村円澄・秦弘彦編、吉川弘文館
- 石井公成 一九九六「仏教受容期の国家と仏教―朝鮮・日本の場合―」『東アジア社会と仏教』シリーズ・東アジア仏教第五巻、春秋社
- 李タウン 二〇〇二「百済の瓦生産―熊津時代・泗沘時代を中心として―」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
- 李 炳鎬 二〇〇一「百済泗沘都城の造営と区画」ソウル大学大学院文学碩士学位論文
- 大脇 潔 一九九六「百済の瓦」『朝鮮の古瓦を考える』帝塚山考古学研究所
- 大脇 潔 二〇〇七「一瓦一会―接合技法―SR技法―の軒丸瓦について」『三宅雄一氏・東鳥取小学校・東鳥取公民館寄贈瓦報告書』阪南市教育委員会

- 賀 雲翱 二〇〇五『六朝瓦磚与六朝都城』文物出版社
- 賀 雲翱 二〇〇九「南朝瓦総論」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、山崎信二編
- 鎌田茂雄 一九八〇「朝鮮仏教の寺と歴史」大法輪閣
- 亀田修一 一九八四「百済漢城時代の瓦に関する覚書―石村洞四号墳出土例を中心として―」『尹武炳博士華甲記念論叢』通川文化社
- 亀田修一 二〇〇六「日韓古代瓦の研究」吉川弘文館
- 亀田修一 二〇〇九「朝鮮半島における造瓦技術の変遷」『古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播』科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書、山崎信二編
- 軽部慈恩 一九四六「百済芸術」寶雲舎
- 河上麻由子二〇〇八「遣隋使と仏教」『日本歴史』第七一七号、日本歴史学会、吉川弘文館
- 姜 友邦 二〇〇〇「韓国瓦当芸術論序説」『新羅瓦磚』国立慶州博物館
- 金 誠亀 二〇〇〇「新羅瓦の成立とその変遷」『新羅瓦磚』国立慶州博物館
- 金 誠亀 二〇〇四「百済の瓦当芸術」『百済文化開究研究歴史文庫九、周留城』
- 金 誠亀 二〇〇五「新羅瓦の分類とその変遷」『隠逸の秀麗な夢 新羅瓦当』嶺南大学校博物館
- 金 有植 二〇〇六「六〇八世紀 新羅瓦研究の検討」『東岳美術史学』第七号、羅庵張忠植教授追慕記念論叢、東岳美術史学会
- 権 五栄 二〇〇三「漢城期百済瓦の製作伝統と発展の画期」『百済研究』第三六集、忠南大学校百済研究所
- 権 五栄 二〇〇八「漢城百済研究の最新成果」『漢城百済の歴史と文化』特別史跡百済寺跡再整備事業推進イベント二〇〇八歴史講演会（百済王氏のルーツを探る―ソウル篇）、枚方市教育委員会・（財）枚方市文化財研究調査会
- 国立扶余博物館 二〇〇二「百済の工房」特別展示図録
- 国立文化財研究所二〇〇一「風納土城Ⅰ」
- 清水昭博 二〇〇三「百済」大通寺式」軒丸瓦の成立と展開―中国南朝系造瓦

技術の伝播―『百濟研究』第三八集、忠南大学校百濟研究所

清水昭博 二〇〇四「百濟「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開―中国南朝系造瓦

技術の伝播―『日本考古学』第一七号、日本考古学協会

清水昭博 二〇〇七「古新羅瓦の遡源に関する検討―有軸素弁蓮華文軒丸瓦を

中心として―『王権と武器と信仰』同成社

沈 奉謹 二〇〇一「新羅瓦製作法に関する研究―慶州勿川里出土瓦を中心と

して―東亜大学大学院文学碩学位論文

末松保和 一九五四「新羅仏教伝来伝説考」『新羅史の諸問題』東洋文庫

諏訪義純 一九九七「中国南朝仏教史の研究」法蔵館

藪田香融 一九八九「東アジアにおける仏教の伝来と受容―日本仏教の伝来と

その 史的前提―『東西学術研究所紀要』第二二集、関西大学東

西学術研究所

谷 豊信 一九八九「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察―墳墓発見

の瓦を中心として―『東洋文化研究所紀要』第一〇八冊、東洋

文化研究所

鄭 治泳 二〇〇七「漢城期百濟瓦製作技法の展開様相―風収土城慶堂地区出

土瓦を中心として―『韓国考古学報』六三集、韓国考古学会

朝鮮古蹟研究会 一九三五「昭和十一年朝鮮古蹟調査報告書」

趙 源昌 二〇〇六「皇龍寺重建瓦当からみた新羅の対南朝交渉―蓮華突帯文

円瓦 当を中心として―『韓国上古史学報』第五二号、韓国上古

史学会

戸田有二 二〇〇一「百濟鏡瓦製作技法について (I)―特に漢城時代と熊津

時代を中心として―『百濟文化』第三〇集、公州大学校百濟文

化研究所

中井真孝 一九九四「朝鮮と日本の古代仏教」東方出版

奈良国立文化財研究所一九五六「飛鳥寺」奈良国立文化財研究所学報 第五冊

比嘉えりか二〇〇八「新羅の瓦」『考古学ジャーナル』No.五七六、特集 東ア

ジアの古代寺院と瓦、ニューサイエンス社

門田誠一 二〇〇二「百濟前期における銭文瓦当の創出とその背景―石村洞出

土資料の再検討―『悠山姜仁求教授停年記念東北亜古文化論叢』

悠山姜仁求教授停年記念論叢編纂委員会

梁 涼鉉 二〇〇八「百濟漢城時代の軒丸瓦」『帝塚山大学大学院人文科学研究

究科紀要』第一〇号、帝塚山大学大学院人文科学研究科

(帝塚山大学)